げんじまきえたばこぼん 源氏蒔絵煙草盆

木胎 金銀高蒔絵 研出 付描 平文 幅27.4cm 奥行17.9cm 高さ18.9cm
江戸時代後期(19世紀) 松井文庫所蔵
肥後熊本藩主細川家 11代目斎樹公の夫人蓮性院(1785~1861)の遺品

びんだいかた てんぼん ひい はいお
鬢台型で、天板に火入れと灰落とし
をおさめた煙草盆です。各面に『源氏
ものがたり
物語』にもとづく文様を、せんさい
織細な金銀
たかまきえ
の高蒔絵で表しています。

それぞれ、『源氏物語』のどの場面
を表しているかわかりでしょうか。

この煙草盆は、細川家 11代目斎樹
公の夫人れんしょういん蓮性院(1785~1861)の所

前 面:春の草花(若菜)に花籠はなかご
左側面:紅葉に火焰太鼓(雅楽器)もみじ かえんだいこ ががっき

用品で、夫人が亡くなったあと遺品として、
松井家に伝えられたものです。

いかにも、大名夫人の持ち物にふさわ
しい優雅で品格のある煙草盆です。蓮性
院は、徳川御三卿のひとり一橋治済の
娘で、11代徳川將軍家齊の妹にあたり、
松井文庫には、ほかにも蓮性院からのはい拝
領品りょうひんが伝わっています。

さて、この煙草盆の文様が、『源氏物語』のどの場面を表しているか、みていきましょう。

参考図は、同じく松井文庫に所蔵される「源氏物語図小屏風」です。

前面:春の草花(若菜)に花籠……「若菜上」(わかなじょう、巻三十四)

光源氏^{ひかるげんじ}40歳の正月の子の日^ね、夕顔の娘^{ひげくろのたいしやう}で髭黒大将の妻となっている玉鬘^{たまかづら}が、二人の息子を連れて源氏と対面し、若菜^{わかな}を献上^{けんじやう}する。

正月最初の子の日には、野に出て小松^{こまつ}を引き、若菜^つを摘んで、宴^{うたげ}を催し、長生き^{もよおし}を祝う風習があった。

この頃、源氏は皇女三の宮を妻に迎えることになり、紫の上の心痛^{しんつう}ははかりしれない。

左側面:紅葉に火焰太鼓(雅楽器)……「紅葉賀」(もみじのが、巻七)

源氏の父桐壺帝^{きりつぼてい}の五十賀^{もみじ}が紅葉^{もみじ}の盛りに行われ、源氏は頭中將^{とうのちゆうじやう}と青海波^{せいがいは}を舞い、その美しさに誰もが見とれていた。御簾^{みす}の中で源氏を見守る藤壺宮^{ふじつぼのみや}(桐壺帝の夫人)は心中^{あだ}穏やかではない。実は源氏の子を身ごもってしまっていたのである。

右側面:掛軸や冊子……「絵合」(えあわせ、巻十七)

帝^{みかど}の夫人^{さいくうにやうご}齋宮女御^{こきでんのにやうご}と弘徽殿女御^{きこうでんのにやうご}が、左右に分かれて絵の優劣を競う「絵合」を行った。

帝の御前で行われた勝負で、齋宮女御方の光源氏が出した須磨^{すま}での絵日記^{えにっぴ}が、人々の感涙^{かんだい}を誘い勝ちとなる。

背面:御所車に夕顔の咲く家……「夕顔」(ゆうがお、巻四)

源氏が、年上の恋人六条御息所^{ろくじやうのみやすどころ}のもとへ通っている頃、夕顔^{ゆうがお}の咲く家に住む女(夕顔)と出会う。ある晩、近くの寺で一夜を過ごす^{いきりやう}が、六条御息所の生霊^{いきりやう}が現れ、夕顔は死んでしまう。